

古典の中の人とからだ(5) : 民数記の中から

著者	平沢 弥一郎, 臼井 永男
雑誌名	放送大学研究年報
巻	9
ページ	19-40
発行年	1992-03-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1146/00007300/

古典の中の人とからだ (5)

—— 民数記の中から ——

平 沢 彌一郎^{*1)}・臼 井 永 男^{*2)}

Man and Body Described in the Classics (5)

— Man and body described in the Book of Numbers —

Yaichiro HIRASAWA and Nagao USUI

ABSTRACT

The Jews who left Egypt were given a code of laws while in the Sinai. (Chapter 19 in the book of Exodus, and Chapter 27 and 34 in the book of Leviticus.)

They began writing “The NUMBERS” (בְּמִדְבָּר) just before leaving the Sinai. In the numbers, many words pertaining to human and body were used. The purpose of this study is to pick out and separate all of the words from numbers as translated by the Japan Bible Association, which pertain to the human and body.

1. Words referring to a body part were used 86 times. Among these words, the word “Eyes” (עֵינַי) was used 18 times.

2. Words referring to life were used 138 times. Among these words, “Kill” (הָרַג) was used 58 times and “death” (מוֹת) was used 52 times.

3. Words referring to a condition of the body were used 47 times. Among these, the word “birth” (יָלַד) was used 16 times.

4. Other words referring to the human body were used 78 times. Among these, the word “body” (בָּשָׂר) was used 56 times.

We believe that the contemporary version of “The NUMBERS” was written in 400 B.C. There are two articles in “The NUMBERS” concerning a census. We do not know the reasons for the articles, or why they were written in such detail. It may have been necessary to group the working people together in order to establish the Holy Land. While in the Sinai, many of the people complained that their God and the times were out of joint.

The writer of “The NUMBERS” used “Body and Human” to neatly express incidents such as disgraceful affairs, unfaithful wives and breaches of faith in their ancestors’ way of life. According to “The NUMBERS” the leader of the people is the God of Yahweh and not Moses. “The NUMBERS” is, therefore, a record of how God protected and led an unfaithful and treacherous people through a desert land.

*1) 放送大学教授 (保健体育)

*2) 放送大学助教授 (保健体育)

I. はしがき

エジプトを出たイスラエルの民は、シナイにおいて律法を与えられた（出エジプト記第19章、レビ記27：34）。その滞在の末期から民数記 **בְּמִדְבָּר** は書き始める。この民数記において、「人とからだ」に関する用語が驚くほど多く用いられている。本研究はそれらの用語を、日本聖書協会訳の民数記の中から拾い上げて、これを分類したものである。

- (1) 身体各部位に関する用語は86回で、最も多い用語は「目」 **עֵין**（18回）であった。
- (2) 生命に関する用語は138回で、最も多い用語は「殺す」 **הָרַג**（58回）、「死ぬ」 **מוֹת**（52回）であった。
- (3) 身体の状態に関する用語は47回で、「生まれた」 **יָלַד**（16回）が最も多かった。
- (4) その他の用語では78回で、「身」 **בָּשָׂר**（56回）が最も多かった。

民数記が現在のような形に纏められたのは、多分紀元前400年頃と推定されている。その本書において2度にもわたる「人員調査」の記事が、いかなる理由をもってかくも克明に記録されているのであろうか。神の国の建設のために、その働きの陣容を結束するためであったのであろうか。ところが、荒野において神に選ばれたその民は、神に対して眩しさと不平を繰り返し、世は甚だしく乱れる。しかし本書の記者は、自分たちの先祖の生きざまを、一例えば貞操を疑われた妻の不祥事や主従の反逆事件などを―「人とからだ」の関わりを巧みに織り合わせながら、しかも赤裸々の記述している。

しかし、本書の主役はモーセではない。ヤハウエ神である。従って本書は、その不信と反逆の民を、神がいかに大いなる忍耐をもって守り導いたかを示す「荒野の記録書」でもある。

「イスラエルの人は、シナイの荒野を出てその旅路に進んだ（民数記10. ¹²）。イスラエル人は、唯一の神への信頼とその律法を自らに誓った。ほぼ一年近くも、彼らはシナイ山でぐずぐずしていた。しかし再び出発し、北の方カナンへと向かって行った。次の宿营地はカデシ、直線距離でシナイから150マイル。ここが、砂漠をさまようイスラエルの子らの次の目標であった。

この道行きもまた、聖書に記された地誌的描写が非常に正確なので、それを正確に跡づけることができる。この道はアカバ湾の西岸ぞいにパランの荒野（民数記12. ¹⁶）―今のバディト・エ・ティン（孤独の荒野の意）―へ続き、そこから湾の東端に沿ってのびている。一行はこの道をとって進んだ（同33. ¹⁶⁻³⁶）。歴史としての「民数記」は、その史実性を物語る。この荒野の旅路における、イスラエル人の様々な生活を記録したものが「民数記」である。その様々な生活の記録とは、とりもなおさず神との関係を縦糸にそして人間同志の葛藤を横糸に織り成したダイナミックな一大絵巻である。

さて、この「民数記」は旧約聖書の創世記から申命記までのいわゆるモーセ五書の第4巻である。本書の名称はラテン訳 Numeri から英訳 Number、漢訳「民数記略」となって元の文語訳にそのまま受け継がれた。「列王記」と「歴代志」の場合と同じく、「略」を取って現在の「民数記」となった。

これは、本書が第1章と第26章に民の数を記している「人員調査」に由来するものである。ラテン訳はギリシャ語聖書の（七十人訳）の *Ἀριθμοί*（数）の翻訳である。ア

ラム語訳、シリヤ語訳は「数の書」である。本来のヘブル語聖書では、他の書と同じく最初の言葉「וַיַּעֲדָבֵר」(ワイエダベール「そして言った」)が書名であったが、今日では「בְּמִצְרָיִם」(ベミヅパール「荒野において」)を用いている。従って「荒野の記」と言ったほうが内容的には適切であろうとも言われている。

Ⅱ. 民数記の中の「人とからだ」

そこで、本書に現れて来る「人」、すなわち人員調査の補助者として登場する代表的人物をまず上げることしよう。〔表1〕

〔表1〕人員調査の補助者 ()内はその原語の意味

(1)シデウル	(シャダイは光り)	1. 5, 2. 10, 7. 30
(2)エリヅル	(わが神は岩)	1. 5, 2. 20, 7. 30
(3)ツリシャダイ	(大能者は岩)	1. 6, 2. 12, 7. 36
(4)シルミエル	(神は平和)	1. 6, 2. 12, 7. 36
(5)アミナダブ	(わが血族は高貴)	1. 7, 2. 3, 7. 2
(6)ナション	(蛇)	1. 7, 2. 3, 7. 12~17
(7)ツアル	(小さい)	1. 8, 2. 5, 7. 18
(8)ネタニエル	(神は賜った)	7. 17~23
(9)エリアブ	(神は父)	1. 9, 2. 7, 7. 24
(10)ヘロン	(勇者)	1. 9, 2. 7, 7. 24
(11)アミホデ	(わが血族は輝かしい)	1. 10, 2. 15, 7. 48
(12)エリシャマ	(神は聞かれる)	1. 10, 2. 18, 7. 48
(13)パダヅル	(岩「神」はあがなう)	1. 10, 2. 20, 7. 54
(14)ガマリエル	(神の報い)	1. 10, 2. 20, 7. 54
(15)ギデオニ	(切る者・勇猛な戦士)	1. 11, 2. 22, 7. 60
(16)アビタン	(わが父はさばいた)	1. 11, 2. 22, 7. 60
(17)アミシャダ	(わが血族はシャダイ)	1. 12, 2. 26, 7. 66
(18)アビエゼル	(父「神」は助け)	26. 30, 2. 27
(19)パギエル	(神の幸運)	1. 13, 2. 27, 7. 72
(20)オクラン	(苦労?)	1. 14, 7. 72, 10. 26
(21)デウエル	(神は友)	1. 14, 7. 4, 10. 20
(22)エリアサフ	(神は増し加える)	1. 14, 2. 14, 7. 42
(23)エナン	(泉)	1. 15, 2. 29, 7. 78
(24)アヒラ	(わが兄弟は邪悪?)	1. 15, 2. 29

〔エルは神・ヅルは岩・シャダイは全能者、恵みを与える者〕

この人達のもつ名前の意味が示すように、それらはすべて神との関係において名付けら

れている。従って、民数記において登場するこれらの「人」とは、神から選ばれた「神の人」であることは言うまでもない。

民数記の冒頭には、「エジプトの国を出た次の年の二月一日に、主はシナイの荒野において、会見の幕屋で、モーセに言われた、『あなたがたは、イスラエルの人々の全会集を、その氏族により、その祖父の家によって調査し、そのすべての男子の名の数を、ひとりひとり数えて、その総数を得させなさい。』と書かれている（1・1-2）。ここで注目すべきことは、「そのすべての男子の名の数を、ひとりひとり数えて、その総数を得よ」という神の命令をモーセは受けたことである。いわゆる聖なる神国結成のための総決起の「時」が切迫していたのであろう。そこで「人員調査」がなされた。第1章と第26章にその結果が記されている。〔表2〕

〔表2〕人員調査がなされた部族とその人員の数（興梠，1959より）

部族名	第1回	第2回	順位	増減
ユダ	74,600	76,500	1	+
ダン	62,700	64,500	2	+
シメオン	59,300	22,200	12	-
ゼブルン	57,400	60,500	4	+
イッサカル	54,400	64,300	3	+
ナフタリ	53,400	45,400	8	-
ルベン	46,500	43,730	9	-
ガド	45,650	40,500	10	-
アセル	41,500	53,400	5	+
エフライム	40,500	32,500	11	-
ベニヤミン	35,400	45,600	7	+
マナセ	32,200	52,700	6	+

民数記の物語の筋を追って見ると、彼等はまずその民の数を数えて陣容を整えた（第1章）。そこで宿営と行軍の秩序を示し（第2章）、特にレビ人についてふれる（第3、4、8章）。各部族長の供え物（第7章）や第2回の過越の祭について記し、そして幕屋の上に神の臨在を示す雲があったこと（第9章）、さらに合図のラッパを用意せよとの神命が下ったことなどが記されている（10・1-10）。第5章と第6章には、貞操を疑われた妻の罪の判断法（5・11-15）と、ナジル人に関する規定（6・1-5）など、風変わりでも興味深い法律が含まれている。

以上の順位をもって、いよいよシナイを出発する（10・1-）。バランまでの事件として食べ物についての眩き（第11章）。モーセ自身についての不平があったことがうかがわれる（第12章）。そして目的地に向かってスパイを送るが、その報告が悪くて失敗する（第13-14章）。そして、コラ・タゲン・アビラム等の反逆というような不祥事件も起こる（第16-17章）。また、多分カデシを中心としたらしい長い放浪（13・26、20・1、14、22）

の末期も中事件が多く、エドム人やアモリ人との接触も生ずる（第20－21）。

第15章には「供え物」のこと、第18には「清めの水」についての律法が挿入されている。この期間は約40年にも及ぶ。しかし、初期と末期がやや詳しいだけで、中間はほとんど反逆事件だけしか書かれていない。勿論これが最大の事件であつたろうが、歴史的記述としてはきわめて不均衡である。そこには、詳しい年代順の記録よりも、事件の教訓を伝えようとする記者の意図がうかがえる。言うまでもなくその教訓とは、「人」が「人」に伝えるべき道徳的倫理である。

南方から目的地に入れなかったイスラエルの民は、東に回ってモアブ人と相対する。モアブ王バラクは著名な占い師バラムを呼んで、これを呪わせようとするが出来ない（第22－24章）。しかし、イスラエル人自身は、異民族との接触によって墮落したらしい（第25章）。ついで、第2回の「人員調査」が行われる（第26章）。後継者ヨシュアが選ばれる（第27章）。そして、ミデアム人との交戦（第31章）、今までの行程の回顧（第33章）、ヨルダン川東西の地域の記録（第32、34章）、またそのほかに小事件と諸種の律法を記している（第28－30、35、36章）。

以上は、民数記の内容の概略であるが、いかなる場所で、何時、また、いかなる「人」が、「からだ」とどのような関わりをもって記されているかを詳らかにするために、地理的に三つ区分を分けて考察した。〔表3〕

〔表3〕地域別からみた民数記の区分（第1部～第3部）

第1部 シナイにおける神的諸規定とそこからの出発〔1：1－10：36〕

(1)	1：1－2：34	十二部族の成人男子の数および宿営と行進の秩序
(2)	3：1－4：49	ゲルション、コハテ、メラリのレビ人の男子の数と、氏族ごとの会見の幕屋での務め
(3)	5：1－6：27	種々な神的規則
	(a) 5：1－4	宿営から汚れを除去する
	(b) 5：5－10	不法な財の償い
	(c) 5：11－31	姦淫の女の神明裁判
	(d) 6：1－21	「ナジル」人の規定
	(e) 6：22－27	祭司の祝福
(4)	7：1－89	十二部族のつかさによる祭壇奉納物のリスト
(5)	8：1－9：14	その他の神的規則
	(a) 8：1－4	燭台の設置
	(b) 8：5－26	レビ人の清めの規定
	(c) 9：1－14	出エジプト後の最初の荒野の過越祭と月遅れの過越祭の規定
(6)	9：15－10：36	シナイからの出発

第2部 荒野における生活〔11：1－20：13〕

(1)	11：1－34	荒野における民の不平
(2)	12：1－16	ミリアムとアロン、モーセに反抗する
(3)	13：1－14：45	約束の地の報告
(4)	15：1－41	祭儀的、儀式的な種々の付則
(5)	16：1－17：11(26)	コラ、ダタン、アビラムの反抗
(6)	17：12(27)－18：32	祭司およびレビ人その他のイスラエル人との関係
(7)	19：1－22	特別な清めの水の設定と適用
(8)	20：1－13	2度目の岩からの水

第3部 土地取得の準備と開始〔20：14－36：13〕

(1)	20：14－21	エドム通過の拒絶
(2)	20：22－29	アロンの死
(3)	21：1－3	ホルマの奪取
(4)	21：4－9	青銅のへび
(5)	21：10－20	旅路の宿营地
(6)	21：21－35	東ヨルダンにおける最初の勝利
(7)	22：1－24：25	バラム物語
(8)	25：1－18	モアブ人の異教礼拝に陥る
(9)	26：1(25：19)－65	2度目のイスラエルの民の数表
(10)	27：1－11	娘たちの嗣業を絶やさぬ判決例
(11)	27：12－23	モーセの死の通告
(12)	28：1－29：40(30：1)	祭儀暦と犠牲表
(13)	30：1(2)－16(17)	婦人の誓いの義務
(14)	31：1－54	ミデアン人への復讐の戦いと戦利品の分配
(15)	32：1－42	東ヨルダンにおける最初の土地分与
(16)	33：1－49	エジプト脱出以来のイスラエルの宿营地
(17)	33：50－34：29	西ヨルダンのあらかじめの土地分割の指示
(18)	35：1－34	レビ人の町とのがれの町
(19)	36：1－13	娘たちの嗣業についての付則

以上は、イスラエル人が放浪した地域を中心に分類したものであるが、その滞在期間は、シナイにおいては20日間（第1－9章）、シナイからモアブへ38年間（第10－21章）、そしてモアブにて約5か月間であった。そこで、その長い期間における滞在記録の記事の中で、「人とからだ」に関する用語を逐一拾い上げた。〔表4〕はその用語が各節でどのように使用されているかを、章を追って拾い上げたものである。

〔表4〕各節に使用されている用語

章と節	使 用 箇 所
1：20	イスラエルの長子ルベンの子たちから生まれたものを
1：22	シメオンの子たちから生まれたものを
1：24	ガドの子たちから生まれたものを
1：26	ユダの子たちから生まれたものを
1：28	イッサカルの子たちから生まれたものを
1：30	ゼブルンの子たちから生まれたものを
1：32	エフライムの子たちから生まれたものを
1：34	マナセの子たちから生まれたものを
1：36	ベニヤミンの子たちから生まれたものを
1：38	ダンの子たちから生まれたものを
1：40	アセルの子たちから生まれたものを
1：42	ナフタリの子たちから生まれたものを
1：51	ほかの人がこれに近づく時は殺されるであろう
3：4	主の前で死んだ
3：38	ほかの人で近づく者は殺されるであろう
4：15	触れると死ぬであろう
4：19	死なないで、命を保つために、このようにしなさい
4：20	見るならば死ぬであろう
5：2	らい病人、流出のある者、死体にふれて汚れた者を
5：13	その事実が夫の目に隠れて現れず、彼女はその身を汚したけれども
5：14	妻が身を汚したために・・・または妻が身を汚した事がないのに
5：18	女にその髪の毛をほどかせ・・・疑いの供え物を、その手に持たせなければならない・・・のろいの苦い水を手に取り
5：20	道ならぬことをして身を汚し
5：21	主はあなたのももをやせさせ、あなたの腹をふくれさせて
5：22	のろいの水が、あなたの腹にはいてあなたの腹をふくれさせ、あなたのももをやせさせる
5：25	祭司はその女の手から疑いの供え物を取り
5：27	もしその女が身を汚し・・・その腹はふくれ、ももはやせて
5：28	もし女が身を汚した事がなく・・・子を産むことができる
5：29	道ならぬ事をして身を汚した時

6 : 2	身を主に聖別する時は
6 : 5	すべて、かみそりを頭に当ててはならない。身を主に聖別した日数の ・ ・ ・ 髪の毛をのばしておかなければならない
6 : 6	身を主に聖別している間は、すべて死体に近づいてはならない
6 : 7	父母、兄弟、姉妹が死んだ時でも、そのために身を汚してはならない。 神に聖別したしるしが、頭にあるからである
6 : 9	彼のかたわらに死んで、彼の聖別した頭を汚したならば、彼は身を清 める日に、頭をそらなければならない
6 : 11	彼が死体によって罪を・ ・ ・ ・ その日に彼の頭を聖別しなければなら ない
6 : 18	聖別した頭をそり、その聖別した頭の髪を取って
6 : 19	聖別した頭をそった後、その手に授け
6 : 25	願わくは主がみ顔をもってあなたを照らし
6 : 26	願わくは主がみ顔をあなたに向け
7 : 9	彼らの務は聖なる物を、肩にになって運ぶことであった
8 : 7	彼らに全身をそらせ、衣服を洗わせて、身を清めさせ
8 : 10	手をレビびとの上に置かせなければならない
8 : 12	手をかの雄牛の頭の上に置かせ
8 : 17	すべてのういごを撃ち殺した日に
8 : 21	レビびとは身を清め、その衣服を洗った
9 : 6	人の死体に触れて身を汚したために
9 : 7	人の死体に触れて身を汚しました
9 : 10	死体に触れて身を汚した人も
9 : 12	またその骨は一本でも折ってはならない
9 : 13	その身は清く
10 : 31	わたしたちの目となってください
11 : 1	主の耳につぶやいた
11 : 6	われわれの目の前には、このマナのほか何もない
11 : 12	わたしがこのすべての民を、はらんだのですか。わたしがこれを生ん だのですか。・ ・ ・ ・ 彼らをふところに抱いて
11 : 15	むしろ、ひと思いに殺し
11 : 18	あなたがたは身を清めて、あすを待ちなさい・ ・ ・ ・ 泣いて主の耳に
11 : 20	ついにあなたがたの鼻から出るようになり
11 : 23	主の手は短かろうか
11 : 33	肉がなお、彼らの歯の間にあって食べつくさないうちに・ ・ ・ ・ 主は 非常に激しい疾病をもって民を撃たれた
12 : 10	ミリアムは、らい病となり、その身は雪のように・ ・ ・ ・ 彼女はらい病に
12 : 12	母の胎から肉が半ば滅びうせて出る死人のように

12:13	どうぞ彼女をいやしてください
12:14	父が彼女の顔につばきしてさえ・・・恥じて身を隠すではないか
14:2	エジプトの国で死んでいたら・・・この荒野で死んでいたらよかった
14:10	石で彼らを撃ち殺そうとした
14:12	わたしは疾病をもって彼らを撃ち滅ぼし
14:15	ひとり残らず殺されるならば
14:16	彼らを荒野で殺したのだ
14:20	しかし、わたしは生きている
14:25	身をめぐらして紅梅の道を荒野へ進みなさい
14:28	わたしは生きている
14:29	あなたがたは死体となって、この荒野に倒れるであろう
14:30	手をあげて誓った地に
14:32	あなたがたは死体となって、この荒野に倒れるであろう
14:33	あなたがたの死体が荒野に朽ち果てるまで
14:35	この荒野に朽ち、ここで死ぬであろう
14:37	疾病にかかって主の前に死んだが
14:38	生き残った
15:35	必ず殺されなければならない。・・・石で撃ち殺さなければならない
15:36	彼を石で撃ち殺し
15:39	自分の心と、目の欲に従って
16:13	荒野でわたしたちを殺そうとしている
16:14	これらの人々の目をくらまそうとする
16:22	神よ、すべての肉なる者の命の神よ
16:29	普通の死に方で死に
16:33	皆生きながら陰府に下り
16:38	罪を犯して命を失った人々の
16:39	かの焼き殺された人々が
16:41	あなたがたは主の民を殺しました
16:46	疫病がすでに始まった
16:47	疫病はすでに民のうちに始まっていた
16:48	すでに死んだ者と、なお生きている者との間に立つと、疫病はやんだ
16:49	コラの事によって死んだ者のほかに、この疫病によって死んだ者は
16:50	こうして疫病はやんだ
17:10	彼らの死ぬのをまぬかれさせなければならない
17:12	私たちは死ぬ
17:13	主の幕屋に近づく者が、みな死ぬのであれば、わたしたちは死に絶える
18:3	死ぬことのないためである
18:7	ほかの人で近づく者は殺されるであろう

18:15	すべて肉なる者のういごであって
18:22	罪を得て死なないためである
18:32	死をまぬがれるためである
19:4	指をもってその血を取り
19:5	自分の目の前で焼かせ
19:7	水に身をすすいで後
19:8	水に身をすすがなければならない
19:9	それから身の清い者がひとり
19:11	すべて人の死体に触れる者は
19:12	灰の水をもって身を清めなければならない・・・身を清めないならば
19:13	死人の死体に触れて、身を清めない者は・・・汚れを清める水がその身に注ぎかけられない・・・その汚れは、なお、その身にあるから
19:14	人が天幕の中で死んだ時
19:16	つるぎで殺された者、または死んだ者、または人の骨
19:18	身の清い者がひとり・・・骨、あるいは殺された者、あるいは死んだ者
19:19	その身の清い人は・・・その人は身を清め・・・水に身をすすがなければならない
19:20	汚れて身を清めない人は・・・水がその身に注ぎかけられないゆえ
20:1	ミリアムがそこで死んだので
20:3	主の前に死んだ時・・・われわれも死んでいたらよかった
20:4	ここで死なせようとするのですか
20:8	その目の前で岩に命じて
20:11	モーセは手をあげ、つえで岩を二度打つと
20:26	アロンはそのところで死んで
20:27	全会衆の目の前でホル山に登った
20:28	アロンはその山頂で死んだ
20:29	全会衆がアロンの死んだのを見たとき
21:2	この民をわたしの手にわたしてくださるならば
21:6	多くのものが死んだ
21:8	それを見るならば生きるであろう
21:9	その青銅のへびを仰いで見て生きた
21:26	ことごとくその手から奪い取ったのである
21:34	ことごとくあなたの手になたす
21:35	ひとり残らず撃ち殺して、その地を占領した
22:7	長老たちは占いの礼物を手にして出発し
22:23	手に抜き身のつるぎをもって
22:25	バラムの足を石がきに押しつけた

22：29	わたしの手につるぎがあれば
22：31	主がバラムの目を開かれたので、彼は主の使いが手に抜き身のつるぎをもって・・・頭を垂れてひれ伏した
22：33	今あなたを殺して
22：38	ただ神がわたしの口に授けられることを
23：5	主はバラムの口に言葉を授けて言われた
23：10	わたしは義人のように死に
23：12	主がわたしの口に授けられる事だけを語る
23：16	言葉を口に授けて言われた
23：18	わたしに耳を傾けよ
23：24	雄じしのように身を起す・・・殺した者の血を飲むまでは身を横たえない
24：1	顔を荒野にむけ
24：2	目を上げて
24：3	目を閉じた人の言葉
24：4	目の開かれた者の言葉
24：8	民を滅ぼし、その骨を碎き
24：9	彼らは雄じしのように身をかがめ
24：10	手を打ち鳴らした
24：15	目を閉じた人の言葉
24：16	目の開かれた者の言葉
24：17	モアブのこめかみと、セツのすべての子らの脳天を撃つ
25：5	バアルにつきしたがったものを殺しなさい
25：6	彼らの目の前で
25：7	やりを手に執り
25：8	またその女の腹を突き通して、ふたりを殺した。こうして疫病がイスラエルの人々に及ぶのがやんだ
25：14	ミデアンの女と共に殺されたイスラエルの人の名は
25：15	またその殺されたミデアンの女の名は
25：18	疫病の起こった日に殺された女の事
26：1	疫病の後
26：10	その仲間はずんだ
26：11	コラの子たちは死ななかった
26：19	エルとオナンとはカナンの地でずんだ
26：29	マキルからギレアデが生まれ、ギリアデからギリアデびとの氏族が出た
26：58	コハテからアムラムが生まれた
26：59	彼女はエジプトでレビに生まれた者であるが
26：60	ナダブ、アビウ、エレアザルおよびイタマルが生まれた

26:61	異火を主の前にささげた時に死んだ
26:65	彼らは必ず荒野で死ぬであろう
27:3	わたしたちの父は荒野で死にました・・・自分の罪によって死んだのです
27:8	もし人が死んで、男の子がいない時は
27:14	水のかたわらで彼らの目の前に
27:16	すべての肉なるものの命の神
27:18	あなたの手をその上におき
27:23	彼の上に手をおき
29:7	あなたがたの身を悩まさなければならない
30:2	その身に物断ちをしようと・・・口で言ったとおりにすべて
30:3	その身に物断ちをしようとする時
30:4	彼女の身に断った物断ちのこと・・・その身に断った物断ちをすべて
30:5	その身に断った物断ちをすべてやめる
30:6	夫のある身で・・・その身に物断ちをしようと、軽々しく口で言った場合
30:7	その身に断った物断ちを守らなければならない
30:8	その身に物断ちをしようと、軽々しく口に言ったことを
30:9	すべてその身に断った物断ちは
30:10	その身に物断ちをしようと誓った時
30:11	その身に断った物断ちはすべて
30:12	身の物断ちについて、彼女が口で言った事は
30:13	すべてその身を悩ます物断ちの誓約は
31:7	その男子をみな殺した
31:8	その殺した者のほかに・・・五人を殺した・・・つるぎにかけて殺した
31:15	あなたがたは女たちをみな生かしておいたのか
31:16	疫病を起こすに至った
31:17	男の子をみな殺し・・・男を知った女をみな殺しなさい
31:18	すべてあなたがたのために生かしておきなさい
31:19	人を殺した者、およびすべて殺された者・・・身を清めなければ
31:50	おのおの手に入れた金の飾り物・・・主の前にわれわれの命のあがないを
32:23	その罪は必ず身に及ぶことを
33:3	エジプトびとの目の前を意気揚々と出立した
33:4	主に撃ち殺されたすべてのういごを葬っていた
33:38	ホル山に登って、その所で死んだ
33:39	アロンはホル山で死んだとき百二十三歳であった
33:55	あなたがたの目にとげとなり、あなたがたの脇にいばらとなり

35：6	人を殺した者がのがれる所
35：11	あやまって人を殺した者を
35：12	人を殺した者が・・・殺されることのないためである
35：15	あやまって人を殺した者が
35：16	人を打って死なせたならば・・・必ず殺されなければならない
35：17	人を殺せるほどの石を取って、人を打って死なせたならば・・・必ず殺されなければならない
35：18	人を殺せるほどの木の器を取って、人を打って死なせたならば・・・必ず殺されなければならない
35：19	血の復讐をする者は、自分でその故殺人を殺すことができる・・・彼を殺すことができる
35：20	故意に人に物を投げつけて死なせ
35：21	恨みによって手で人を打って死なせたならば・・・必ず殺されなければならない・・・血の復讐をする者は・・・殺すことができる
35：23	人を殺せるほどの石を投げつけて死なせた場合
35：24	その人を殺した者と、血の復讐をする者との間を
35：25	その人を殺した者を血の復讐をする者の手から救い出して・・・大祭司の死ぬまで
35：26	もし人を殺した者が
35：27	血の復讐をする者が・・・血の復讐をする者が、その人を殺した者を殺しても、彼には血を流した罪はない
35：28	大祭司の死ぬまで・・・人を殺した者は自分の所有の地にかえる
35：30	人を殺した者・・・殺されねばならない・・・ひとりの証言によって殺されることはない
35：31	死に当たる罪を犯した故殺人の命のあがないしろを・・・彼は必ず殺されなければならない
35：32	大祭司の死ぬ前に
35：33	流血は地を汚すからである・・・流された血は、それを流した者の血によらなければあがなうことができない

次に、第4表で使用されている「人とからだ」に関する用語が、記事の中のどこで何回使用されているかをまとめて考察した。〔表5〕

〔表5〕第1部－第4部
第1部 身体各部の名称（使用箇所と回数）

(1) 頭部

部位	使用箇所（章と節）	回数
髪の毛	ראש (rō's), שער (šē'ār) 5 : 18 6 : 5	2
髪	ראש (rō's), שער (šē'ār) 6 : 18	1
頭	ראש (rō's) 6 : 5 6 : 7 6 : 9 6 : 9 6 : 11 6 : 18 6 : 18 6 : 9 22 : 31	9
脳天	24 : 17	1
こめかみ	24 : 17	1
み顔	פנים (pānīm) 6 : 25 6 : 26	2
顔	פנים (pānīm) 12 : 14 24 : 1	2
目	עין ('ayin) 5 : 13 10 : 31 11 : 6 15 : 39 16 : 14 19 : 5 20 : 8 20 : 27 22 : 31 24 : 2 24 : 3 24 : 4 24 : 15 24 : 16 25 : 6 27 : 14 33 : 3 33 : 55	18
耳	אזן ('ōzen) 11 : 1 11 : 18 23 : 18	3
鼻	אפים ('appayim) 11 : 20	1
口	פה (peh) 22 : 38 23 : 5 23 : 12 23 : 16 30 : 2 30 : 6 30 : 8 30 : 12	8
歯	שן (shēn) 11 : 33	1

(2) 付幹部

部位	使用箇所（章と節）	回数
肩	שכם (Sh°kem) 7 : 9	1

脇	צָר (tsad) 33 : 55	1
ふところ	חֵיק (chēq) 11 : 22	1
腹	מַעִים (me'im) 5 : 21 5 : 22 5 : 22 5 : 2 25 : 8	5
胎	רֶחֶם (rechem) 12 : 12	1

(3) 腕部

部位	使用箇所 (章と節)	回数
手	יָד (yād), כַּף (kaph) 5 : 18 5 : 18 5 : 25 6 : 19 8 : 10 8 : 12 11 : 23 14 : 30 20 : 11 21 : 2 21 : 26 21 : 34 22 : 7 22 : 23 22 : 29 22 : 31 24 : 10 25 : 7 27 : 18 27 : 23 31 : 50 35 : 21 35 : 25	23
指	אֶצְבַּע ('etsba') 19 : 4	1

(4) 脚部

部位	使用箇所 (章と節)	回数
もも	יָרֵךְ (yārēk) 5 : 21 5 : 22 5 : 27	3
足	רֶגֶל (regel) 22 : 25	1

第2部 生命に関する用語 (使用箇所と回数)

部位	使用箇所 (章と節)	回数
殺す	הָרַג (hārag) 1 : 51 3 : 38 8 : 17 11 : 15 14 : 10 14 : 15 14 : 16 15 : 35 15 : 35 15 : 36 16 : 13 16 : 39 16 : 41 18 : 7 19 : 16 19 : 18 21 : 35 22 : 33 23 : 24 25 : 5 25 : 8 25 : 14 25 : 15 25 : 18 31 : 7 31 : 8 31 : 8 31 : 8 31 : 17 31 : 17 31 : 19 31 : 19 33 : 4 35 : 6 35 : 11 35 : 12 35 : 12 35 : 15 35 : 16 35 : 17 35 : 17 35 : 18	58

	35 : 18	35 : 19	35 : 19	35 : 21	35 : 21	35 : 23	
	35 : 24	35 : 25	35 : 26	35 : 27	35 : 27	35 : 28	
	35 : 30	35 : 30	35 : 30	35 : 31			
死ぬ	מָוֶת (mūth)						52
	3 : 4	4 : 15	4 : 19	4 : 20	6 : 7	6 : 9	
	14 : 2	14 : 2	14 : 35	14 : 37	16 : 29	16 : 48	
	16 : 49	16 : 49	17 : 1	17 : 12	17 : 13	17 : 13	
	18 : 3	18 : 22	18 : 32	19 : 14	19 : 16	19 : 18	
	20 : 1	20 : 3	20 : 3	20 : 4	20 : 26	20 : 28	
	20 : 29	21 : 6	23 : 10	26 : 10	26 : 11	26 : 19	
	26 : 61	26 : 65	27 : 3	27 : 3	27 : 8	33 : 38	
	33 : 39	35 : 16	35 : 17	35 : 18	35 : 20	35 : 21	
	35 : 23	35 : 25	35 : 28	35 : 32			
死に方	מָוֶת (māweth)						1
	16 : 29						
死							1
	35 : 31						
命	נֶפֶשׁ (nepeš)						6
	4 : 19	16 : 22	16 : 38	27 : 16	31 : 50	35 : 31	
生きる	חַי (chay)						9
	14 : 20	14 : 28	14 : 38	16 : 33	16 : 48	21 : 8	
	21 : 9	31 : 15	31 : 18				
いやす	רָפָא (rāphā')						1
	12 : 13						

第3部 身体の状態を表す用語（使用箇所と回数）

部位	使用箇所（章と節）	回数
産む	זָרַע (zāra')	1
	5 : 28	
生む	יָלַד (yālād)	1
	11 : 12	
生まれた	יָלַד (yālād)	16
	1 : 20	1 : 22
	1 : 24	1 : 26
	1 : 28	1 : 30
	1 : 32	1 : 34
	1 : 36	1 : 38
	1 : 40	1 : 42
	26 : 29	26 : 58
	26 : 59	26 : 60
らい病人	שָׂרֹא (šārūa')	1
	5 : 2	

らい病	צָרַעַת (šara'at) 12 : 10	מִצְרָע (m ° šōrā') 12 : 10	2
死体	פֶּגֶר (peger) 5 : 2 6 : 6 6 : 11 9 : 6 9 : 7 9 : 10 14 : 29 14 : 32 14 : 33 19 : 11 19 : 13		11
死人	נֶפֶשׁ (nephesh) , + מוֹת (mūth) 12 : 12 19 : 13		2
疫病	דִּבְרָר (deḇer) 11 : 33 14 : 12 14 : 37 16 : 46 16 : 47 16 : 48 16 : 49 16 : 50 25 : 8 25 : 18 26 : 1 31 : 16		12
はらんだ	בֶּטֶן (beṭen) זָרַע (zāra') , hiph 11 : 12		1

第4部 その他の状態を表す用語（使用箇所と回数）

部位	使用箇所（章と節）	回数
全身	כָּל-בָּשָׂר (kol-bāsār) 8 : 7	1
身	בָּשָׂר (bāsār) 5 : 13 5 : 14 5 : 14 5 : 20 5 : 27 5 : 28 5 : 29 6 : 2 6 : 5 6 : 6 6 : 7 6 : 9 8 : 7 8 : 21 9 : 6 9 : 7 9 : 10 9 : 13 11 : 18 12 : 10 12 : 14 14 : 25 19 : 7 19 : 8 19 : 9 19 : 12 19 : 12 19 : 13 19 : 13 19 : 13 19 : 18 19 : 19 19 : 19 19 : 19 19 : 20 19 : 20 23 : 24 23 : 24 24 : 9 29 : 7 30 : 2 30 : 3 30 : 4 30 : 4 30 : 5 30 : 6 30 : 6 30 : 7 30 : 8 30 : 9 30 : 10 30 : 11 30 : 12 30 : 13 31 : 19 32 : 23	56
骨	גֵּרֶם (gerem) 9 : 12 19 : 16 19 : 18 24 : 8	4
肉	בָּשָׂר (bāsār) 12 : 12 16 : 22 18 : 15 27 : 16	4
血	דָּם (dām) 23 : 24 35 : 19 35 : 21 35 : 24 35 : 25 35 : 27 35 : 27 35 : 27 35 : 33 35 : 33 35 : 33	11
つばき	רָקַק (rāqāq) 12 : 14	1

Ⅲ. 考 察

(1) 身体各部位に関する用語の中で「目」が最も多く使われている(18回)。聖書の中には、「目」עֵינַיִם は859回、ὀφθαλμός は101回使用されている。この語の頻出度が高いことは、人間生活において「目」がいかに重要な役割をもっているかを示す。またそこから種々の象徴が生まれている。目は重要な知覚器官から、その無上価値を認め、「目の瞳のようにまもる」という表現が用いられた(申命32. 10, 詩篇17. 8, 箴言7. 2)。他方、「目」は誘惑が心に入り込む通路となり、情欲の生まれる機会を与える(創世3. 6, エゼ6. 9, Iヨハ2. 16, IIペテ2. 14)。人類の最初の罪は、「目」を通して起こったのである(創世3. 6)。

しかし、「目はからだの明りであり」(マタ6. 22)、人の全人格を代表する。憐れみを与え、もしくはこれを差し控え(申命7. 16, イザ13. 18, 輕蔑し(箴言30. 17), また満足と不満足を表す(箴言27. 20)。また、象徴的には、「目」は神の全知、全能に関連して用いられている(エゼ1. 18, 10. 12, ゼカ3. 9, 4. 10, 黙示5. 6)。聖書では「妬み」[マコ7. 22, ὀφθαλμος πονηρός, 字義は「悪い目」, また, Iサム18. 9の「うかがった」は動詞 יָצַק の訳で, 「ねたみ」をもって「目」をつけることを意味する], また「物惜しみ」[עֲרֵב 申命15. 9], 「欲の深い人」[אִישׁ רָע עֵין, 箴言28. 22]は「悪しき人」を意味し, 反対に「目が澄む」(マタ6. 22)とは寛大を意味したものであろう[箴言22. 9, 「恵む者」טוֹב-עֵין, 字義は「善い目」]。

「神の前に出る」と訳されている句の原語の意味は、「神の顔を見る」であるが、直接的な表現をさけて「神の前に出る」と訳し、聖所への巡礼また参詣をさして用いた(出エ34. 23-1, 申命16. 16, Iサム1. 22, イザ1. 12, 詩篇42. 2(3))。

ヨハネは神、またキリストについて「見る」という語を、信仰による視覚また超自然的知識について用いている(ヨハ6. 40, 12. 5, 14. 9, 9. 19, IIIヨハ11)。彼はまたキリストに対して、正しい見方をもつことは、神の子として神の唯一の啓示者なる彼を通して、神を見ることが出来ると語っている(ヨハ3. 11, 32, 6. 46, 8. 38)。

民数記の中に出てくる「目」は、神との関係において用いられる。「モーセは言った、『どうかわたしたちを見捨てないでください。あなたは、わたしたちが荒野のどこに宿営すべきかを御存じですから、わたしたちの目になって下さい』」とある(10. 31)。

(2) 生命に関する用語では、「殺す」と「死ぬ」が多く、いずれも50回を越えている。旧約聖書における「死」は、すべての人間にふりかかってくる神秘的な事件であって、キリスト者とか否とかの区別はない。有神論者、無神論者の区別もない(ヨブ21. 32, 33, 詩篇49. 12(13). 20(21), 伝道12. 7, エゼ33. 14)。それは、「世の人のみな行く道」である(ヨシ23. 14, I王2. 2)。死は生物学的現象であり、あらゆる生物に共通な自然的变化であり、宇宙間の多くの現象の一つである。

創世記第3章によれば、人間は神に反抗した罪のために死ぬべき者となり、動物も蛇の言動によって死ぬものとなったようである(創世3. 14, ヨナ3. 7-9)。しかし、人間の死はその本人に予感されていて、特別の意味を持つ出来事であり、死の事実は一一般に

宗教の信仰と深い関係を持つ宗教的事件である。

人間が死ねば、「息絶えて、その民に加えられる」。民数記の中で数多く用いられている「殺す」も「死ぬ」の用語、つまりその中に秘められている内容は、結局のところ「死」は死の断絶では連続であるという思想のようである（民数20. 26, 27. 13）。

(3) 身体の状態に関する用語では、「生まれた」が冒頭において多く使われている。本書で使われている「生む」「生まれた」は、もちろん「出産」の意味ではない。連綿と繋がるイスラエル人の「系図」を明らかにするためのものである。聖書における系図とは、イスラエルのある個人の家系とか、また部族、種族、国民などの由来を歴史的に順を追って列記した、一連のリストである。民数記は他に見られない特徴は、部族の「人員調査」である。そのためには、部族の系図を示す必要があったと考えられる。そのために「生まれた」という用語が多く使用されたものと推測される。

(4) その他の用語の中で、最も多く使われているものは「身」（56回）である。さて、この語の原意は、「肉体」のことであろうか。あるいは「からだ」のことであろうか。בָּשָׂר は「肉」である。旧約聖書の中には、260か所を超える בָּשָׂר のうち、口語聖書で「からだ」と訳されているところは、きわめて少ない。旧約では、新約のように、「肉」と「からだ」とを二つの語によって区別することをしない。なぜであろうか。イザヤ書40. 6には、「人は（בָּשָׂר）みな草だ。その麗しさは、すべて野の花のようだ。主の息がその上を吹けば、草は枯れ、花はしぼむ。たしかに人は草だ」とある。この語の真意は、東洋的な思想をもってしては理解が困難なのであろうか。

民数記の中で、「身を汚す」、「身を清める」という用語が25回ほど使われている。これらの箇所では用いられている בָּשָׂר は、「からだ」であると同時にその「人」を表しているものと考えられる。その一例として、5. 11-13の原文に当たってみることにする。

- 11 וַיְדַבֵּר יְהוָה אֶל-מֹשֶׁה לֵאמֹר: דַּבֵּר אֶל-בְּנֵי יִשְׂרָאֵל
 12 ,Israel the to Speak ,saying ,Moses to Jehovah And
 of sons spoke
 וְאָמַרְתָּ אֲלֵהֶם אִישׁ אִישׁ כִּי-תִשָּׁטָה אִשׁ אִשְׁתּוֹ וּמַעַלָּה בּוֹ
 against has and ,wife goes When man's any ,them to you and
 ,him committed astray say shall
 13 מַעַל: וְשָׁכַב אִישׁ אִתָּהּ שֹׁכֶבֶת-זָרָע וְנִעְלָם מֵעֵינֵי אִשְׁתּוֹ
 her from has it and ,semen lying with man a lie and a
 husband's eyes hidden been (with) her ,trespass
 וְנִתְּתָהּ וְהָיָה נִמְמָאָה וְעַד אֵין כָּהּ וְהָיָה לֹא נִתְּפָשָׁה:
 been has not and against no and been has and kept is and
 ,caught she ,her witness ,defiled she ,hidden
 14 וְעָבַר עָלָיו רוּחַ-קְנָאָה וְקָנָא אֶת-אִשְׁתּוֹ וְהָיָה נִמְמָאָה אֵ-
 or been has and ,wife his is he and ,jealously a over has and
 ;defiled she of jealous of spirit him passed

- עָבַר עָלָיו רוּחַ־קִנְיָאָה וְקִנְיָאָה אֶת־אִשְׁתּוֹ וְהִיא לֹא נִטְמָאָה :
 become has not and ,wife his is he and jealousy a over has
 ;defiled she of jealous of spirit him passed
- 15 וְהָבִיָא הָאִישׁ אֶת־אִשְׁתּוֹ אֶל־הַכֹּהֵן וְהָבִיָא אֶת־קֶרְכָּנָהּ
 offering her he and the to wife his the shall then
 bring shall ,priest man in bring
- עָלֶיהָ עֲשִׂירֵת הָאֵיפָה קֶמַח שְׁעָרִים לֹא־יִצַק עָלָיו שֶׁמֶן
 ,oil it on shall he not ;barley meal an tenth a ,her for
 pour of ephah of
- וְלֹא־יִתֵּן עָלָיו לִבְנָה פֶּי־מִנְהַת קִנְיָאָה הִיא מִנְהַת וּבָרִין
 ,memorial food a ,(is) it jealousy food a for ,frank incense on shall nor
 of offering of offering it put
- מִזְבֵּחַת עֹון :
 .sin bring to
 mind to

11ヤハウエがモーセに言われた、12「イスラエルの男達に告げよ、もしか誰かある人の妻が誘惑された。道に外れたことをして、その夫に罪を犯すようなことをしてかした。13つまり人が彼女と寝たのに、そのことが夫の目に隠れて見つからず、彼女自身そのように身を汚したけれども、それを目撃した証人もなく、彼女もまたその現場を押さえられなかった。そんな場合、14すなわち、妻が罪を犯したために、その夫が疑いの心を起こして、妻を疑うことがある。15そんな場合、夫は妻を祭司のところに引っ張って行き、彼女のために、大麦の粉一エパの十分の一（約36リットル）を供え物として持って来なければならない。ただし、その上に油を注いではいけない。また、乳香を足してはならない。これは「疑いの供え物」、「覚えの供え物」であって、罪を覚えて神の判断を受けさせるためである。

[平沢私訳]

この姦淫の女の「神明裁判」(5. 11-31)は、われわれには一見滑稽にも思われる。しかし、ここで用いられている「身」は、姦淫を犯した「人」、すなわちその「女」である。しかし、その彼女を汚したのは彼女のその「からだ」である。汚れた「からだ」は水で洗い清めなければならない(前号・レビ記15. 16-18)。これは、とりもおさずヤハウエ神の律法であり命令である。しかし、罪を犯したその女(人 בָּשָׂר)の魂の清めと、悔い改めのためには、いかなる手立てが必要なのであろうか。

IV. 結 語

民数記の中から、「人とからだ」に関する用語を逐一拾い上げたところ、総計229回使用されていることが明らかとなった。そのうち、(1)身体各部位に関するものは86回、(2)生命に関するものは138回、(3)身体の状態に関するものは47回、そして、(4)その他の用語では78回であった。さらにそれらの中で、(1)では「目」(18回)、(2)では「殺す」(58回)と「死ぬ」(52回)、(3)では「生まれた」(16回)、また、(4)では「身」(56回)でそれぞれ最も多く使用されていた。「目」、「殺す」、「死ぬ」、「生まれる」、「身」について考察したと

ころ、それらは、ことごとく「神と人」との関わりにおいて使用されており、さらに「からだ」はつねに神に対する「罪」との関わりをもっていることが明らかにされた。

V. あとがき

われわれが立っているとき、目は上にあり、外にあり、そして前にある。日常の生活をふりかえってみると、目が地上につくとき、心はなんとなくうなだれる。目を内部に注ぐとき、醜悪な自分の姿に身震いをする。そして、さらに目を後ろ、すなわち過去に向けるとき、悔恨の黒い浅ましい影が脅かす。しかし、目が下を見、内を見、そして後ろを見るとき、それはただ苦悶であり、絶望である。そのとき、ときには、むしろ死の甘さをさえる。それは「目」であっても「眼」であってもかまわない。

当たり前と言えはそれまでであるが、われわれの目は、上を見るべく目を上に、内を見ないで外を見るべく外に、そして、後ろを見ないで前を見るべく作られている。人間が「立つこと」によって与えられたこの働きは、まさに「人」であることの *raison d'être* ではなかろうかとも思われる。

この正常な目の使用法に従わず、オートバイのバックミラーのようにいつも後ろばかり注視している人、自分の腹ばかりを見つめている人、ゴミ溜を漁る鶏のような人を、中世の詩人A. ダンテは、神の恩恵の拒否であるとして、その神曲・地獄篇第7環第3円の熱砂の上において、永劫の灼熱に苦しめている。

民数記の記者は、「人」も「からだ」も、いや、目も、顔も、脳天も、髪の毛も、耳も、鼻も、口も、歯も、腿も、足も、血も、つばきも、すべて神の所有物であるということを、畏れおののきながら書き記しているように思われてならない。

□本文中のヘブライ語の字母は平沢所有のものを使用。

参考文献

- 1) BIBURIA HEBRAIKA : Edited by RUDOLF KITTEL (1937)
- 2) Interlinear Hebrew—English Old Testament : KREGEL REPRINT LIBRARY by George Ricker Berry (1975)
- 3) THE NEW ENGLISH BIBLE : OXFORD UNIVERSITY PRESS. CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS (1970)
- 4) SEPTUAGINTA : Edited by Alfred Rahfs. EDITIO SEXTA (1931)
- 5) THE MOFFATT TRANSLATION OF THE BIBLE, CONTAINING THE OLD AND NEW TESTAMENTS : by JAMES MOFFATT (1964)
- 6) The Body : J. Robinson : p. 11, n. 2(1952)
- 7) 旧約聖書：関根正雄，創元選書・創元社（1966）
- 8) 旧約聖書総論：ゼリンニロスト・関根正雄訳。待晨堂（1965）
- 9) 旧約聖書の人びと I : F・ジェイムズ・山本七平訳。山本書店（1985）

- 10) 旧約聖書：日本聖書協会（1956）
- 11) 聖書語句大辞典：教文館（1959）
- 12) 出エジプト記：関根正雄訳．岩波文庫（1969）
- 13) 新聖書大辞典：キリスト新聞社（1971）
- 14) 古代思想にあらわれたひととからだ：真方敬道．聖書とその周辺・伊藤節書房（1959）
- 15) キリスト教大辞典：教文館（1968）
- 16) 古典の中の人と体(1) —— 詩篇の中から —— ：平沢彌一郎・臼井永男．放送大学研究年報第5号（1987）
- 17) 古典の中の人とからだ(2) —— 創世紀の中から —— ：平沢彌一郎・臼井永男．放送大学研究年報第6号（1988）
- 18) 聖書を読む：平沢彌一郎・論創社（1987）
- 19) 小使途：平沢彌一郎・小使途社（1989）
- 20) NOVUM TESTAMENTUM GRAECE：BESTLE—ALAND.26th.（1979）
- 21) 歴史としての聖書：ウェルネ・ケラー著・山本七平訳・山本書店（1958）
- 22) 旧約聖書註解シリーズ，民数記：興梠正敏，新教出版社（1959）

（平成3年12月4日受理）